

【公表の参考様式（管理機関用）】

令和 5 年 8 月 2 日

## 令和 4 年度 特別の教育課程の実施状況等について

岐阜県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
多治見市立笠原小学校（外 校）	多治見市教育委員会	国・ <b>公</b> ・私

## 1 特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表	学校関係者評価結果の公表
多治見市立笠原小学校	<a href="http://school.city.tajimi.lg.jp/s-kasahr/">http://school.city.tajimi.lg.jp/s-kasahr/</a>	<a href="http://school.city.tajimi.lg.jp/s-kasahr/">http://school.city.tajimi.lg.jp/s-kasahr/</a>

## 2 特別の教育課程の内容

## (1) 特別の教育課程の概要

当該校は、平成 15 年度より笠原中学校とともに研究開発学校の指定を受け、「小中連携による外国語教育の在り方」に関する研究実践に取り組んできた。指定期間を終了後もこれまでの実践をさらに拡充するために申請を延長し、特別の教育課程を編成・実施してきた。

これまでの取組では、小学校 6 年間を通じた系統的な外国語教育を展開し、当該校の主たる進学先である笠原中学校では、義務教育修了段階での外国語の到達目標の引き上げが行われた。また、当該校においては、これまでの外国語活動の成果を損なうことなく、「教科としての外国語」に向けて、円滑に転換するための効果的な指導方法と評価のあり方の究明に取り組み、一定の成果をあげた。

小学校学習指導要領の改訂により、外国語活動が 3 年生から教科化されるなど、大きな転換期を迎える中でこれまでの実践の成果を継承しつつ、地域の付託に応える学校を具現し、市内はもとより県内外に対して小学校における外国語教育に関する教育情報の提供をめざすものである。

## (2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

当該校は研究開発学校として、実践的なコミュニケーション能力の育成をめざし、音声から言語を獲得する能力を習得するのに有効とされる時期である小学校の早い段階（低学年）から、児童の発達段階及び教育課程全体を考慮し、「聞く」「話す」の言語活動を中心とした外国語教育を展開し、一定の成果を上げてきた。

また、これまでの取組を支えているのは、笠原町内での幼保小中の連携であり、学びの場での連携の中核を担ってきたのが外国語教育である。これまでの歩みもあり、今では地域や保護者からの強い期待もあり、特別の教育課程の編成・実施についての理解が得られている。

(3) 特例の適用開始日  
令和5年4月1日

(4) 取組の期間  
令和5年4月1日

### 3 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

#### (1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
- 一部、計画通り実施できていない
- ほとんど計画通り実施できていない

#### (2) 実施状況に関する特記事項

当該校ではALTが2名常勤しており、担任との綿密な打合せのうえで授業を行うことができている。経験豊富なALT及び、ネイティブスピーカーでアイデア豊富なALTのもとで、日々の英語教育の充実が図られている。

#### (3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
- 実施していない

#### <特記事項>

児童の自己評価「英語の授業は楽しく、自分のためになっている」という項目では以下のような結果が得られている。

「そう思う」62.6%、「どちらかといえばそう思う」29.5%、「どちらかといえばそう思わない」6.0%、「そう思わない」1.8%という全校集計の結果が得られ、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計は92.1%である。

また、保護者の学校評価「子どもは英語活動のよさを感じて前向きに取り組んでいる」という項目には「そう思う」35.0%「どちらかといえばそう思う」51.4%、「どちらかといえばそう思わない」10.9%、「そう思わない」2.7%という結果になった。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が86.4%と保護者の評価は昨年度より3.4%上がっている。

今後とも、英語の授業を通して褒めて伸ばすよう職員の意思統一を大切にしていく。

#### 4 実施の効果及び課題

##### (1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

当該校は、「心の宝物に満ちた学校」を経営方針として「やさしく かしこく たくましく」の教育目標の具現を目指している。知・徳・体のバランスのとれた育成のためには、児童一人一人の内に確かな自己肯定感を育むことが最重要であるにとらえ、実践している。

また、研究主題を「生き生きとコミュニケーションを図る児童を育てる指導の工夫～笠原型コンテンツ・ベイストの手法を用いた授業づくりと適切な評価の在り方～」とし、研究推進に取り組んできた。笠原型コンテンツ・ベイストとは「伝え合う内容を重視し、問題解決的な活動により、伝え合う必然を生み出す」指導方法を探求するものであり、「問題解決的な活動により、『聞く・話す・読む・書く』必然を生み出すとともに、コミュニケーションへの意欲を高める目的・場面・状況の設定」「児童の意欲、関心が高い学習事項を生かした題材」「驚きや発見、気づきの生まれる伝え合う値打ちの高い内容」という3点から児童の育成を図っている。活動を通してコミュニケーションのよさ、自他のよさに気付く機会が増え、とらえる目や、伝える言葉も豊かになっており、大きな成果となっている。

##### (2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

小学校低学年から、全学年を通して系統的に教科（「外国語科」）としての外国語の学習を実施することにより、小学校における外国語教育の一層の充実を図ることができる。その中で、児童一人一人のコミュニケーション能力を伸ばすとともに自国や外国の文化の理解を広げ、深める事を通して、将来、国際的な活動に参加できる資質・能力を育むことができる。このことは、教育基本法第2条第2号、同条第5号及び学校教育法第21条第3号に掲げる教育の目標に関する規定に適合している。

#### 5 課題の改善のための取組の方向性

研究開発校としての使命を終えているが、特別の教育課程の編成・実施を行う中で「外国語科」の実践の継続と、その検証を実施していく必要がある。